

希望の架け橋、 中東協力センター50周年おめでとう



国際教養大学 理事長・学長 モンテ・カセム

中東における日本の資源外交

日本は自らを資源に乏しい国だと考えてきた。日本が第二次世界大戦の焼け野原から四半世紀で世界有数の経済大国となったのは、エネルギー革命のおかげであることを考えれば、それは理解できる。大規模で洗練された水力発電システムから、化石燃料を利用した経済への移行である。中東のエネルギー資源開発への賢明な投資と相まって、日本は慎重な外交を展開し、中東で多くの友好国を獲得した。先見の明で UAE を誕生させたシェイク・ザイドは日本に目を向けたことや、カタールのアティヤ石油相兼副首相の日本に対する尊敬と好意は、ここにまで遡ることができる。高度経済成長を続けてきた日本が、1973年、日本の工業発展パラダイムの根幹を襲った第一次石油危機によって突然終わりを告げたときの災難は想像に難くない。中東から日本へのエネルギー資源の流入を確保するためのセコンドトラックの外交努力として、同年、中東協力センター（JCCME）が誕生した。

JCCME の50年

この半世紀の間に、JCCME は進化してきた。今日、JCCME は、1973年以来、中東の地政学という難局を乗り切るために日本に貢献してきた、由緒あるマルチトラック機関である。実際、このセンターは日本の「ソフトパワー」外交の最も初期のシンボルのひとつである。私が評議員を務めてきた17年間で、JCCME は当初のエネルギー資源の安全保障に重点を置いた活動から、人材育成や文化交流を含む活動へと発展してきた。JCCME の年次「中東協力現地会議」の常連として、私はこの機会が日本の産業界でますます信頼されるようになるのを目の当たりにしてきた。中東・北アフリカ（MENA）に造詣の深い知識人は、少数ながら毎回参加しており、会議の議論の基調を作っている。科学者である私は、このような会議ではいささか異端児のような存在だったが、多くのことを学んだ。しかし、なぜこの会議が日本のメディアや学術機関からもっと注目されないのか、不思議でならない。JCCME は、ドキュメンタリー映画や朝の連続テレビドラマの主演になるにふさわしいスポットライトを浴びてしかるべきだ。控えめで、効果的で、まさに伝説的な日本の謙虚さの現れである。

次は？未来への礎

私たち全員が50年の功績を祝い、喜びを分かち合うとき、「次はどうするのか」と問うのは時宜を得たことかもしれない。この50年間、JCCMEは政府・非政府の幅広い関係者をテーブルに着かせる役割を果たしてきた。その結果、中東情勢が不安定であったにもかかわらず、日本の中東からのエネルギー供給を安定させることができた。確かに、1973年と1979年の石油危機は、日本の産業界をよりエネルギー効率の高いものにした。しかし、石油とガスの供給における中東の圧倒的な優位性は、今日に至るまでセンターの活動を適切なものにしてきている。次の50年については、日本は国際的な舞台で新たな課題に対処しなければならないだろう。現在から今世紀半ばにかけて、日本が乗り切らなければならない不安定な、そしておそらくは変動的な3つの領域が出現している：

- (1) カーボンニュートラルへの移行における新たなエネルギーと雇用の不確実性、
- (2) 「人間とは何か」を問う、科学技術の劇的な変革、
- (3) 「グローバル・サウス」が台頭し、ポスト・ブレトン・ウッズの世界秩序へと移行する際の、新たな地政学的現実。

結論として

JCCMEの強みは、ボラティリティが高いにもかかわらず、安定をもたらすために慎重に取り組む能力にある。今後50年間、JCCMEが繁栄していくためには、この点から力を引き出すべきだろう。上記の3つの「壮大な課題」に中東・日本関係という文脈で取り組むことが、半世紀間希望の架け橋であったJCCMEの今後50年にわたってセンターの存在価値が認められ続けるための土台となるだろう。